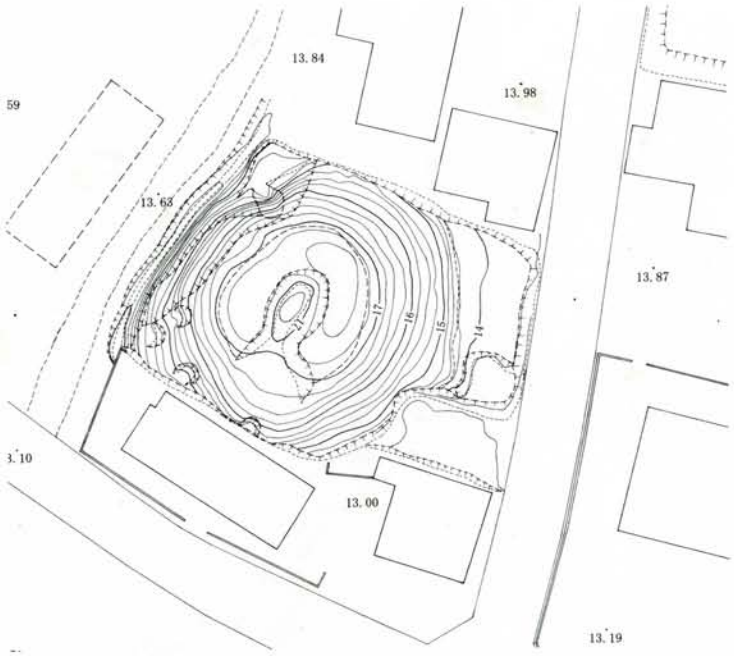
新富町文化財調査報告書　第 33 集

町内遺跡 18

平成13年度町内遺跡発掘調査概要報告書
（春日地区遺跡・新田原29号墳）



新田原29号墳

2 0 0 2

宮崎県児湯郡・新富町教育委員会

序

新富町の文化財保護については日頃から深い御理解をいただき厚く御礼申し上げます。

本年度も町内の開発行為にともなう２遺跡を調査をいたしました。

新田原29号墳は墳丘測量を中心とした調査でしたが、これまで調査が少なかった山之坊古墳群で、２例目の墳丘測量で直径約25mに復元できる円墳、あるいは前方後円墳であることが予想され、葺石も良好な状態で保存されていることがわかりました。古墳時代前期を中心とした首長墓系譜であると考えられます。

春日地区遺跡第２次調査では縄文時代から古墳時代までの遺構が発見されました。縄文後期の土器廃棄場の検出は当地に大きな集落の存在を予想させます。また古墳時代中期の住居は祇園原古墳群分布域では初めての例で、古墳築造に従事した人々の生活が伺える資料ではないかと思われます。

本町はこれら文化財の保護を推進し、学術研究はもとより広く生涯学習の素材として活用していく考えです。

最後になりましたが、調査に際してお世話になった関係各機関の方々に深く感謝を申し上げます。

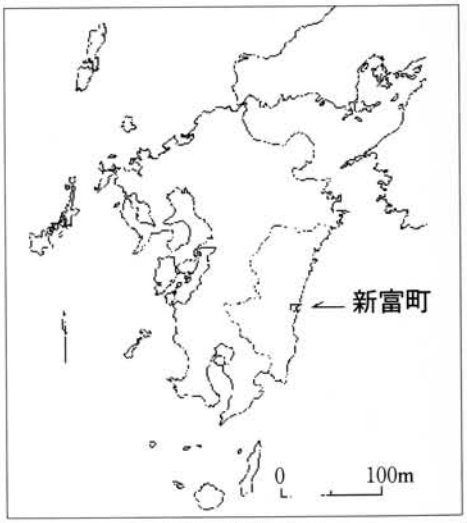
平成14年３月　　新富町教育長　清　郁雄

例　言

1．本書は平成13年度に宮崎県児湯郡新富町教育委員会が実施した周知の遺跡地における緊急発掘調査の概要報告書である。
2．発掘調査は、一部を除き国庫補助事業「町内遺跡発掘調査等」を適用して行った。
3．各遺跡の調査期間は本文中の表１・２に明記した。
4．本書で使用した位置図は国土地理院発行の２万５千分の１図を基に作成し、調査範囲図はそれぞれ平板実測で作成した 200分の１測量図をもとに作図した。
5．本書で使用する方位は座標北（座標第Ⅱ系）であり、レベルは海抜絶対高である。
6．遺構実測は、有馬義人、松永幸寿、小守容子がおこなった。
7．遺構の写真は有馬・松永が撮影した。
8．整理作業は有馬、松永、小守で行い、遺物実測及びトレースは有馬が行った。
9．本書の執筆・編集は有馬がおこなった。
10．出土遺物その他の記録はすべて新富町教育委員会社会教育課に保管してある。

本文目次

Ⅰ．はじめに ……1～4ページ
Ⅱ．春日地区遺跡第２次……5～8ページ
Ⅲ．新田原29号墳……9～12ページ



新富町位置図

Ⅰ．はじめに

１．新富町の位置と概要

新富町は宮崎県中央部の日向灘沿岸に位置し、県庁所在地である宮崎市から約20km北にある。北西部から南東部にかけては一ツ瀬川が蛇行しつつ東進し、その流域左岸部の沖積平野と標高70～90mの台地面にかけて町域を有する。町面積は南北約７km、東西約９kmの約61km²で、隣接する市町村には西に西都市、北に高鍋町、南に佐土原町がある。

主幹産業は酪農や園芸を中心とした農業で、台地の中心部には陸上自衛隊新田原基地があるため「やさいと基地の町」のイメージが強い。人口は約19,000人で、近年の道路交通網の整備にともない本町での宅地開発が活発になっているため、不況下にあっても人口は緩やかな増加傾向にある。

２．新富町の文化財保護

町では昭和43年に文化財保護審議委員会を設立し、町内の文化財保護を推進している。指定文化財は国指定２、県指定２、町指定６があり、内訳は史跡２、天然記念物３、無形民俗３、有形文化財２である。

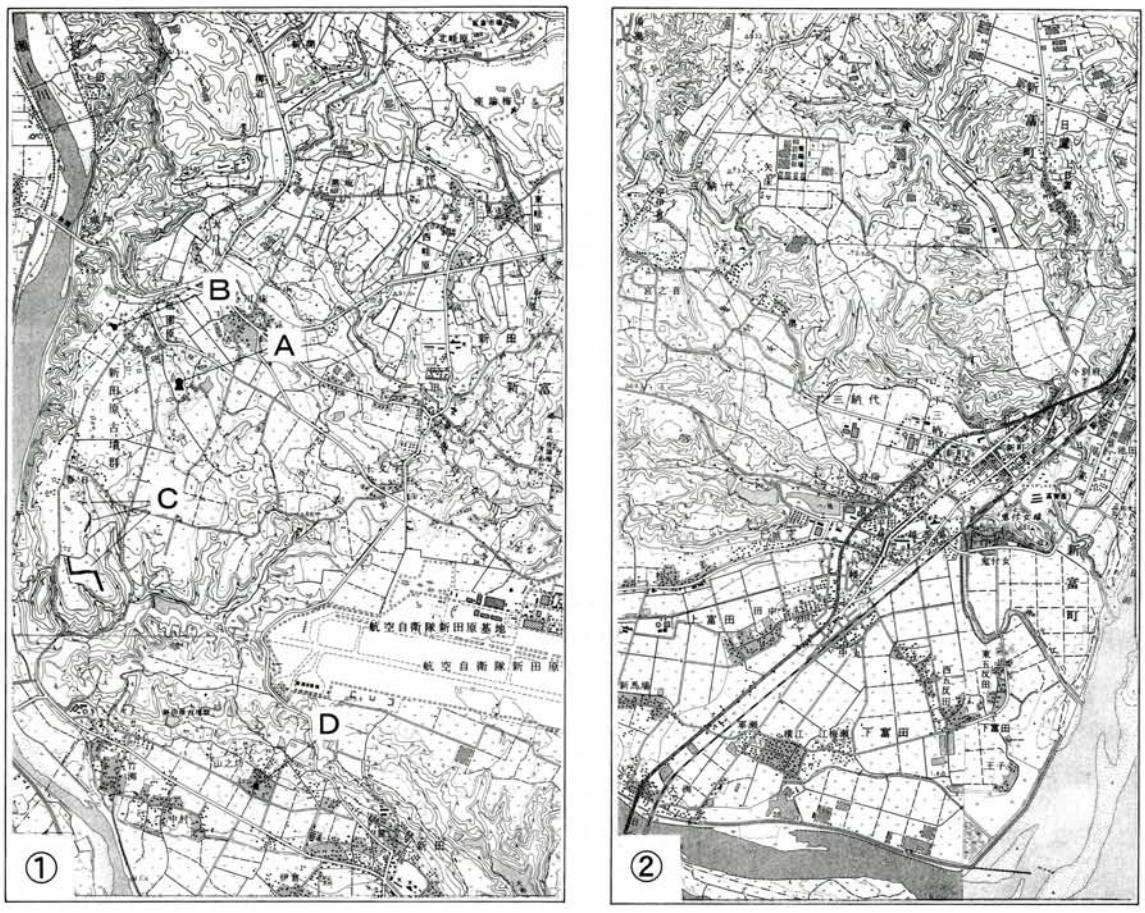
天然記念物には湯之宮座論梅・春日のイチョウ・アカウミガメの３件が指定されている。それぞれ下草管理や徒長枝剪定などを行っている。アカウミガメは列島的な海岸面積の減少に関係してか毎年上陸頭数が少なくなっており、県下一斉の保護対策が求められている。無形民俗文化財には湯之宮棒踊り、元禄坊主踊り、新田神楽がある。各団体の自助努力により活発な活動が行われており、後継者を含めた総合的な支援が求められる。有形文化財には三納代神社の釈迦如来座像と厳島神社の薬師如来立像があり、ほかに保存状態の良くないものや製作年代の古いものが多い。

埋蔵文化財は開発行為によって消滅する頻度が高いため、年間を通じて調整・調査を行っている。史跡では国指定新田原古墳群の史跡整備を進行中で、平成９年度から発掘調査を行っている。短期整備では平成17年度から墳丘復元等の大規模整備を計画中である。また町ですすめる総合文化公園整備事業で既存の文化会館のほかに図書館・歴史資料館を建設する予定があり、この歴史資料館（仮称）を中心に古墳群やその他文化財にガイダンスや案内板を設置し、見学や学習に寄与する予定である。

３．埋蔵文化財の調査

昭和50年代に始まった畑地帯のほ場整備にともない埋蔵文化財発掘調査がかなりの面積にわたってを行われてきた。これら大規模調査の成果によって、1982年に行った遺跡詳細分布調査における「周知の遺跡」はその数が飛躍的に多くなった。

また近年の町内における開発行為は区画整理や畑地のほ場整備など大規模開発が終息しつつある一方、東九州縦貫道や県道の整備、農道整備にともなって周辺の小規模開発（宅地開発・町道整備など）が多発する現状にある。現在個々の事業に対し、個別に対応し、事業調整を行っているが、調査成果を含めた「第２次詳細分布調査」を実施すべきであろう。



A 新田原58号墳（百足塚古墳）
B 新田原187号墳
C 春日地区遺跡 第２次
D 新田原29号墳

第１図　平成13年度に調査した遺跡

本年度の調査は以下の体制で行った。

【調査体制】

総　　括　清　　郁雄（新富町教育委員会教育長）
　　比江島　年見（同　社会教育課課長）
　　富田　　次男（同　社会教育課主管兼課長補佐）
庶　　務　若木家えつ子（同　社会教育課副主管：庶務担当）
調整・調査　有馬　　義人（同　社会教育課主事：文化財担当）
調査補助員　松永　　幸寿（同　社会教育課嘱託：埋蔵文化財調査補助員）
参加学生　小森昌子（宮崎大学）、冨田綾（東洋大学）、山本紗弥香（宮崎国際大）
作　業　員　小守容子、杉尾美千子、野尻富子、甲斐晴子、滝口則雄、滝口恵美子
　　日野君代、岩下ヨシ子、上原咲子、河野隆子、椎春子、寺原利雄、宮本昭男

表１　平成13年度発掘調査一覧

	遺跡名	所在地	調査期間	申請者	面積	内　容	検出遺構の時代
1	春日地区２(A)	新田14788-1	8/17～10/18	児湯農林振興局	1,212	一般農道24	縄文後期、古墳中期
2	春日地区２(B)	新田14951-2	11/ 1～12/ 8	児湯農林振興局	318	一般農道23	弥生の住居か？
3	春日地区２(C)	新田14173-2	11/ 2～11/ 9	児湯農林振興局	24	15号集水路	古墳の周溝、溝状遺構
4	春日地区２(D)	新田13906-1	12/ 1～12/14	児湯農林振興局	65	26-1号承水路	弥生時代の住居
5	百足塚古墳	新田字東俣	4/23～ 3/31	新富町長	2,000	史跡整備	古墳後期の前方後円墳の
6	新田原29号墳	新田15844-2	12/10～ 1/31	新富町長	6,000	保存目的	古墳前期の円墳測量
7	音明寺第１※	新田字音明寺	4/ 4～ 7/31	日本道路公団	5,500	高速道路	旧石器～縄文
8	西畦原第１※	新田字西畦原	4/ 3～ 7/31	日本道路公団	2,700	高速道路	弥生
9	西畦第２※	新田字西畦原	5/ 7～ 2/28	日本道路公団	7,220	高速道路	散布地
10	東畦原第３※	新田字東畦原	4/ 4～ 9/28	日本道路公団	1,800	高速道路	旧石器
11	尾小原※	新田字尾小原	11/ 1～ 3/31	日本道路公団	5,500	高速道路	旧石器～縄文
12	東畦原第１※	新田字下迫	11/ 1～ 3/29	日本道路公団	5,800	高速道路	散布地
13	東畦原第2※	新田字中原	11/ 1～ 3/31	日本道路公団	4,000	高速道路	散布地
14	祇園原地区※	新田字祇園原	5/ 1～ 6/30	高鍋土木事務所	560	県道木城西	古墳
15	春日地区※	新田字花園	8/ 1～	高鍋土木事務所	560	県道木城西	古墳
16	春日地区※	新田字花園	9/ 1～	高鍋土木事務所	4,200	県道木城西	古墳

※は宮崎県埋蔵文化財センターが発掘調査を行った。

表２　平成13年度立会調査一覧

	遺跡名	所在地	調査日	申請者	面積	内　　容	備　　考
1	春日地区	新田14600-2	8/25	児湯農林	351	農保22-1,2集水路	既堀
2	春日地区	新田14669-2	10/11	児湯農林	258	農保25号承水路	既堀
3	祇園原地区	新田15970	11/10	児湯農林	320	農保６号集水路	既堀
4	祇園原地区	新田15654-4	12/ 1	児湯農林	28	農保９号承水路	既堀
5	祇園原地区	新田14463-1	12/10	児湯農林	39	農保27号承水路	既堀

4．文化財啓発活動

生涯学習や学社融合の一環として、町内外から文化財についての講演や見学会、勉強会等の要望が寄せられることが多い。町教委ではこれらの要望に応えるため、文化財の普及啓発活動の一環として下記の事業を行った。

表４　新富町の文化財啓発活動

月日	内　　容	講師・担当	対　象	人数
4/24	新田原古墳群の見学（百足塚古墳）	松永	富田小６年	120
4/26	新田原古墳群の見学（百足塚古墳）	松永	上新田小６年	40
5/15	新田原古墳群の見学（百足塚古墳）	有馬	新田小６年	80
5/17	湯之宮座論梅の学習（梅の説明・収穫）	有馬	上新田小５年	50
5/28	郷土史講座③「新富町からみた旧石器」	藤木聡（宮崎県埋文センター）	学級生	20
6/30	新富町の文化財について	有馬	上新田中	40
7/23	高齢者学級（文化財研修）	有馬	学級生	30
9/23	郷土史講座③「土器文化について」	松永	学級生	20
11/ 7	かながわ考古同好会古墳見学	有馬	会員	30
11/28	福寿学園文化財巡見	有馬	学級生	30
12/14	郷土史講座③「死者の埋葬」	有馬	学級生	20
12/15	郷土史講座④「一ツ瀬川流域の古墳見学」	有馬	学級生	20
12/19	プロバスクラブ「新富町の文化財」	有馬	会員	20
1/30	福寿学園「発掘調査と文化財の保護」	有馬	郷土史講座生	50
年内	富田小学校文化財愛護少年団活動 8/4・5　うみやま交流日之影町へ 12/1　　県立博物館見学 3/14　　退団式	富田小学校教諭 有馬	富田小５・６年	15

Ⅱ．春日地区遺跡第２次

１．遺跡の位置と調査の経緯

新富町の北西部台地面には154基の古墳で構成される祇園原古墳群がある。同古墳群分布域のうち、南部を春日地区遺跡、北部を祇園原地区遺跡とし、現存する墳丘以外を周知の埋蔵文化財包蔵地としている。祇園原古墳群は一ツ瀬川左岸台地上標高70～90mに分布し、台地上に入り込む谷によって４つのグループに大別できる。春日地区遺跡はそのうちのＣグループの分布域を含み、前方後円墳１基、方墳１基を含む33基の国指定墳が現存している。

当地には、戦前から開拓の手が入り、山林となっていた古墳は消滅あるいは掘削の対象になったようだ。現存する古墳も築造当時の姿をとどめていないが、最近の調査で周溝や地下に埋蔵した構造物が判明するようになってきた。

昭和63年には国指定141号墳近くで地下式横穴が初めて発見された[(1)]。平成４年度と同６年度には国指定159墳周辺が地中レーダー調査され、消滅墳と指定墳の周溝や地下式横穴の存在が予測されている[(2)]。さらに平成11年度には東側斜面に位置する１次調査で、消滅墳の周溝１基が確認されている[(3)]。

祇園原地区遺跡・春日地区遺跡のある新田原台地北西部は酪農を中心とした畑地帯である。昭和43年には春日地区で、平成４年度には祇園原地区でほ場整備が行われ、農業環境を充実させる諸整備が進んでいる。平成９年度からは、その一環として県営一般農道整備事業祇園原工区の工事が開始され、本年度はその６年目にあたる。

町教委は当地が国指定史跡を包括する広大な遺跡であることと、平成４年のほ場整備にともなう調査でも多くの消滅墳の周溝を確認していることから、継続して調整・調査を行ってきた。

今年度の調査は県営一般農道整備事業で２箇所（23・24号路線）、県営農地保全事業で２箇所（15号集水路、26-1号承水路）が本調査対象となった。

調査は平成13年８月17日から開始し、工事の都合で断続的に実施し、同年12月14日に終了した。

２．遺構・遺物の概要

調査区は一般農道24号道路部分をＡ区、同23号道路部分をＢ区、農地保全26号承水路部分をＣ区、同16号承水路部分をＤ区とした。なお竪穴住居はSA、土坑はSDと略称する。

①　Ａ区

工事範囲は延長約303m、幅約４mの面積約1,212㎡で、南から東そして西に曲がる逆L状を呈する。全体に表土が厚く、調査区の中央部に大きな溝状の攪乱が及んでいたが、東西両端部では遺構が良好に保存されていた。

検出できた遺構は、東部に集石遺構９、竪穴遺構３、土坑１、溝状遺構２があり、西部で竪坑１基、住居２基、アカホヤ層上面の黒色土から縄文土器・石器が大量に検出できた。

集石遺構（SI0201～SI0209）

北東部の角部で９基が検出できた。北西部の調査区外は傾斜面になっている。検出時は全

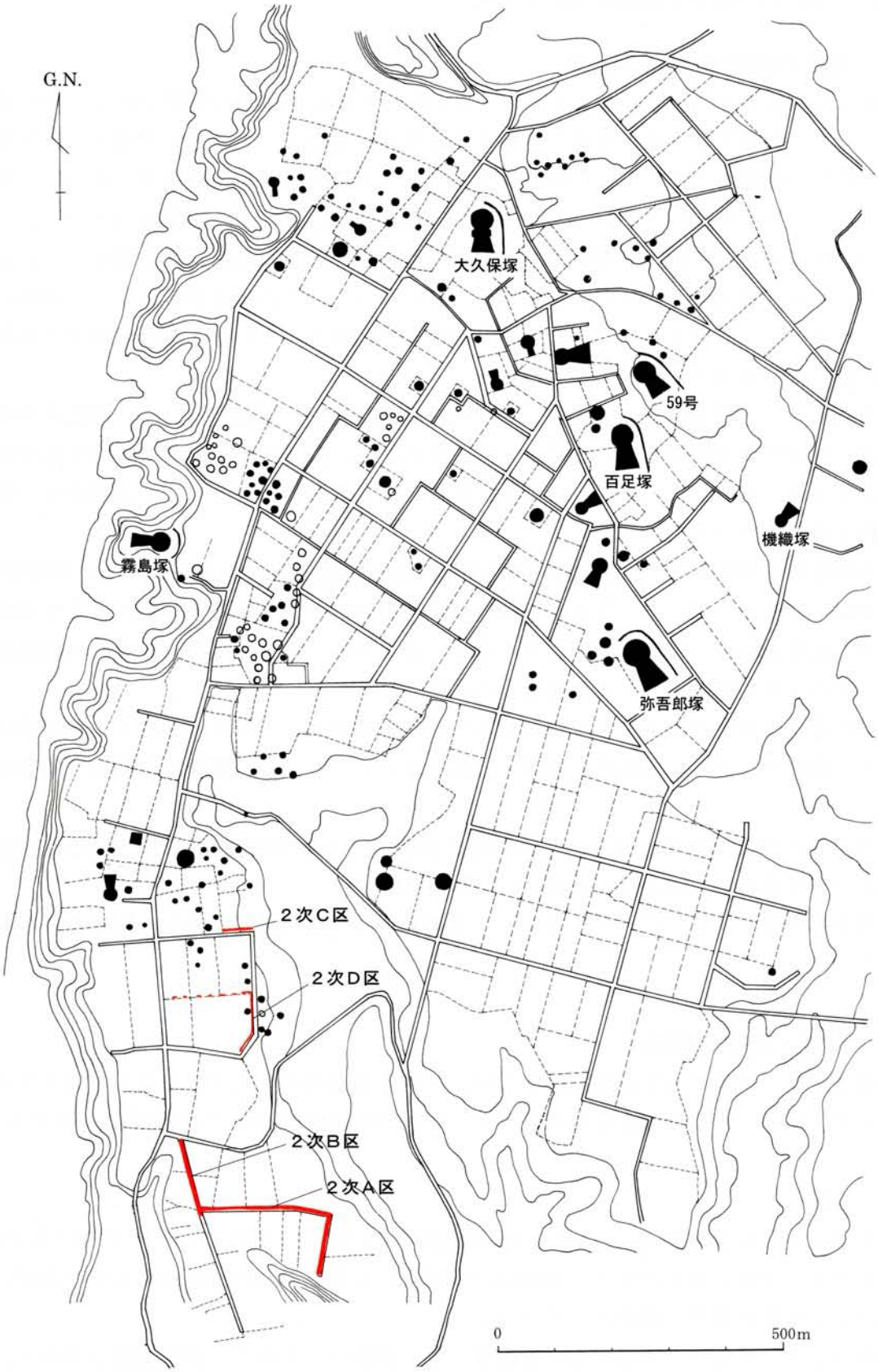


図２　祇園原古墳群と調査区

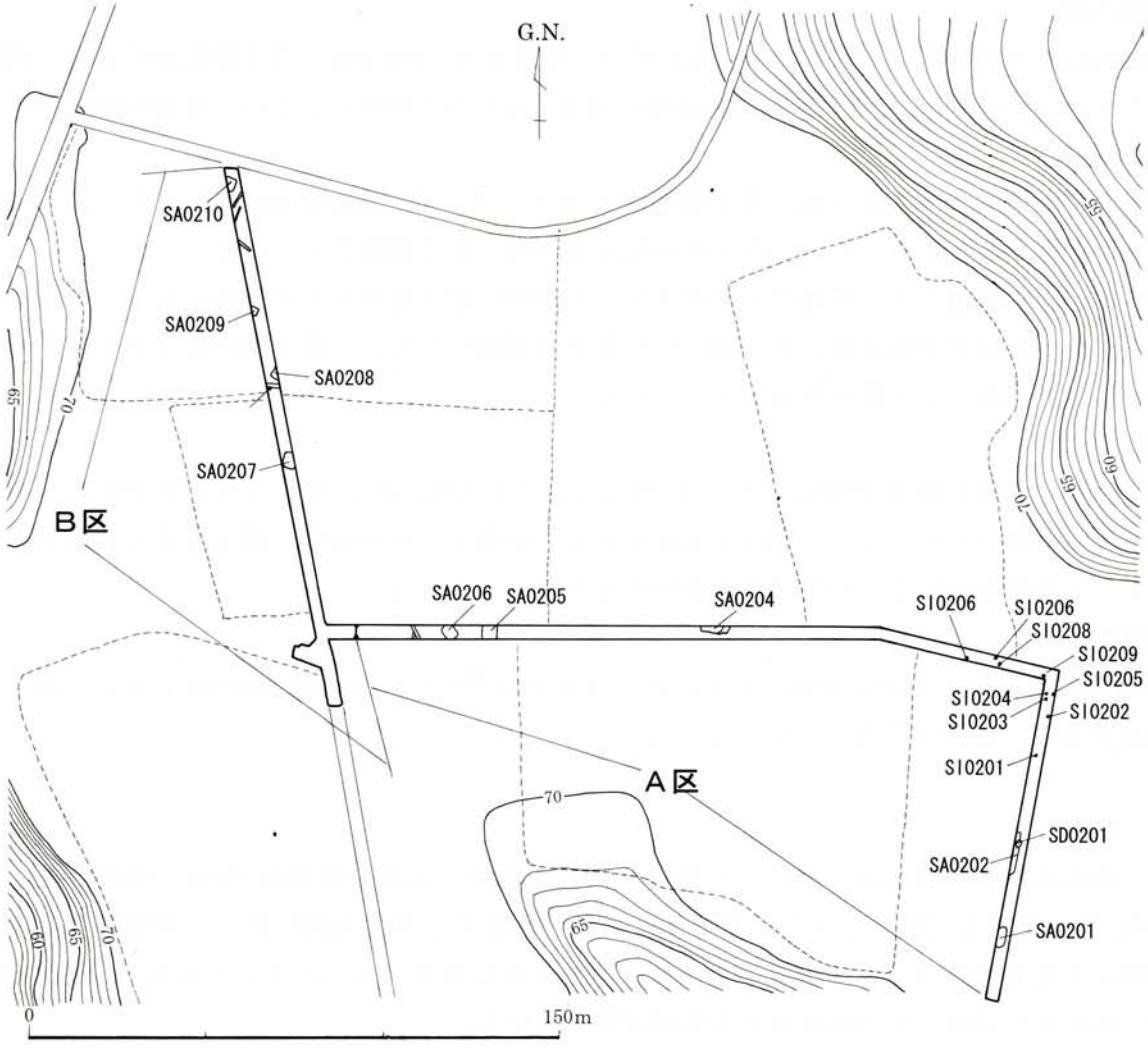


図３　春日地区遺跡２次調査区

面に礫が散乱した状態で、それぞれを単独の集石遺構として区分できない状態だった。３基は堀方が明瞭で、特にSI0205は径30cmの大きな礫を置いていた。礫は５cmから10cmのものが多く、多い物では150個の礫で１つの集石遺構が構成され、熱を受け砕けたものが多い。集石とその周囲からは石器、土器片が少量検出できた。土器は小片だが押形文が多い。

SA0201

長径約７m、短径推定約３mを測る長楕円形の平面プランで、北側に浅い張出部を有する。深いところで、検出面から床面までが約27cmを測る。ピットは確認できなかった。遺物も少なく土器片数点があるにすぎない。築造時期は不明。

SA0202

検出部で長さ約13.6m、幅約1.2m、深さ約10mを測る。柱穴は検出できず、時期不明。埋土の状況から比較的新しいものと推測され、SD0201を掘削している。築造時期は不明。

SA0203

SA0204を掘削している。検出部での規模は、長さ7.2m、深さ約40cmで、幅が不明の隅丸方形プランと推測できる。東側の壁沿いにピットが３カ所確認できるが、SA0203に帰属するものか判然としない。時期を特定できる遺物は出土していない。

SA0204

SA0203に東壁を掘削されている。検出できた規模は長さ約4.6m、深さ約35cmである。西側でピットが5カ所確認できるが、この遺構に帰属するものか判然としない。築造時期は不明。

SA0205

調査範囲の限界から北と南の壁が確認できなかった。東西辺約3.8mの長方形に近い平面プランを呈すると考えられる。中央部が畑地灌漑用の溝で掘削されている。

柱穴が2本確認でき、床面の中央部よりやや南側に焼土を含む穴が認められる。床面は全体に約14cmの貼床が施されるが、硬化した箇所は認められない。碧玉製の勾玉が1点出土しており、土師器・須恵器が少量出土している。

SA0206

北西部・南頭の隅角が検出でき、1辺約4.2mの正方形に近い平面プランを呈する。中央部が溝で掘削されている。主柱は4本柱である。中央よりやや南側に焼土を含んだピットがある。土師器高坏片などのほか須恵器杯身片が出土している。

SD0201

SA0202によって上面が掘削されていた。平面形は径約1.2～1.4mの楕円形を呈し、深さ約1.4mを測る。底面は先細りになっている。

② B区

一般農道23号路線全面にわたって遺構検出した結果、北側の延長約170m、幅約3m、面積約510m²が調査対象になった。調査地はA区の西側で、南北方向に長い。南西側にはかつて禅宗大光寺の末寺である松源寺があり、明治4年に廃寺になったといわれる[4]。同地の竹林に永禄9（1566）年の銘を有する宝塔が残っている。

南から北に向けて緩やかな傾斜があり、北部はアカホヤ層上の黒色土の堆積が厚く、南部の遺構遺存度は低かった。

検出できた遺構は竪穴住居4基、集石遺構1基、溝状遺構10基を数える。

SA0207（図4－3）

北東側の隅角が不明だが、長辺約4.8m、短辺約3.5mの長方形の平面形を呈する。検出面から床面までの深さは約20～35cm。ピットが数カ所見つかっており、2本柱の可能性が高い。焼土面は確認できない。中央から南側に床面の硬化した箇所が広がる。壁寄りは軟質の貼床がなされている。土師器、石器が検出できたが、須恵器は出土していない。

SA0208

調査区範囲の限界から全体の半分しか調査されていないが、長辺3.2m・短辺2.7mの長方形の平面プランを呈する。検出面から床面までの深さは約40cm。柱穴が1カ所見つかっており、全体のバランスから2本柱の住居であると推測できる。土師器片が少量が出土している。

SA0209

検出部の規模は長辺2.8m、短辺1.6m以上の方形プランを呈し、床面までの深さが10～20cmである。ピットが2箇所あるが、柱穴になるか不明。土師器片が10点出土している。

SA0210（図4－2）

長辺約4.4m、短辺約4.2mのほぼ正方形の平面形を呈する。住居中央から南よりに炉が検

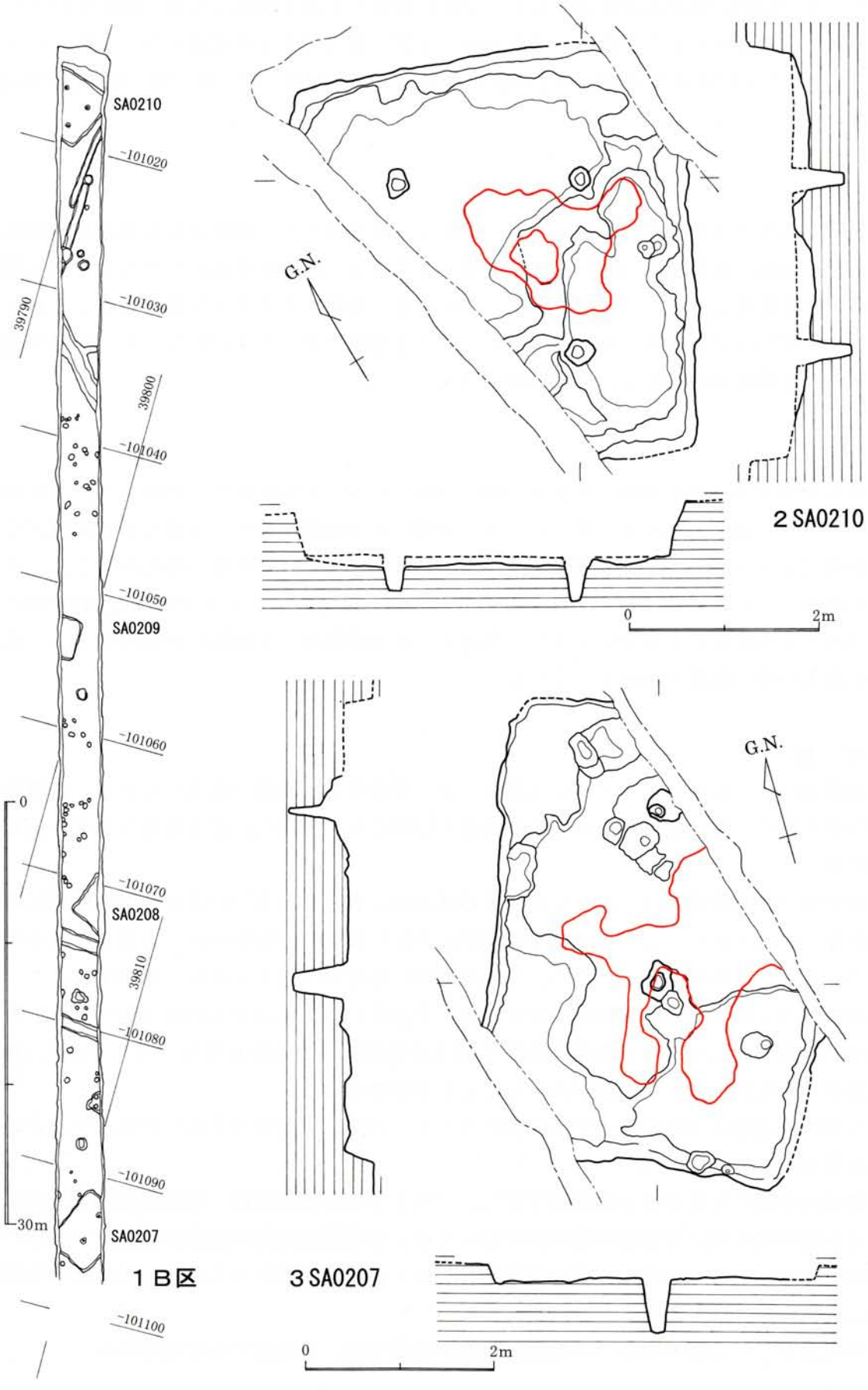


図4　2次調査B区・SA0207・SA0210

出でき、その周囲に硬化面が確認できる。全体に壁寄りを深く造成した後、貼床を行っている。現状で検出面から床までの深さは約50cmに及ぶ。柱穴は３カ所確認でき、全体のバランスから４本柱の主柱を有する住居址と判断できる。土師器の甕・壺・坏・埦、須恵器の杯蓋、甕の破片が出土している。

③　C区

農地保全事業15号集水路の延長約40m、幅約１mを調査した。調査区は台地東側の傾斜面に立地し、西側には指定147号墳・同155号墳などがある。調査区は狭いため人力で表土掘削を行い、遺構検出に努めた。掘削の結果、西から東に傾斜するアカホヤ面が遺存しており、その上には約70cmに及ぶ厚い表土が堆積し、しかも攪乱が深いことがわかった。西側で住居と考えられる遺構(SA0211)の一部が検出できた。

④　D区

農地保全事業26-2号承水路の延長約130m、幅約１mが工事対象で、全面人力による遺構検出を行った。調査区は西から東にわたり、東側の台地端部にむかって南に続く調査区である。全体に表土が深く、特に南側では約1.2mに及んだ。しかも全体に攪乱が深く、アカホヤ層が遺存しているのは南側の一部でしかなかった。南北のトレンチでは指定163号墳の周溝の一部と溝状遺構が１基発見できた。周溝からは須恵器片、土師器片が検出できた。埋土から中溝式の甕の胴部片が出土している。

３．小　結

２次調査のＡ・Ｂ区は、これまで未調査であった春日地区遺跡の南部にあたる。古墳時代後期の群集墳が主体であったこれまでの調査とは異なり、各時代に渡る重要な知見を得ることができた。

縄文早期の集石遺構群はこれまで祇園原地区遺跡に含まれる瀬戸口遺跡や祇園原地区遺跡５次調査で検出されている[5]。それらの遺跡は今回と同様に台地傾斜面に立地し、ほかの調査区ではまったく検出できないため、土地の利用に仕方の一端が分かり、興味深い。

縄文後期の土器捨て場は検出状況からして、まだ広い分布を示すものと予想できる。最近の県内の調査例では田野町本野原遺跡等で縄文時代後期の大集落が発見されている[6]。春日地区遺跡でも周囲に大きな集落があったことを予測させる。

弥生時代の遺構は今回の調査では検出できなかったが、中溝式の土器片が存在するため、今後注意する必要があろう。

古墳時代中期の住居址は６基確認できた。これまで春日地区遺跡・祇園原地区遺跡の分布域では古墳時代初頭の住居址の検出例はあったが、古墳築造時期の集落検出例はなかった。古墳時代中期には群の北部で古墳の築造が行われていると予想されるため、当該期の集落の存在は古墳群の性格を考える上で重要だろう。

今年度調査した遺跡の内容は一般農道整備事業終了後、本報告する予定である。

Ⅲ．新田原29号墳

1．位置と調査の概要

新富町大字新田に所在する新田原古墳群は、昭和19年に指定された国指定史跡である。その分布は４つの群に大別されるため、東から塚原古墳群、石船古墳群、山之坊古墳群、祇園原古墳群と呼んでいる。

このうち山之坊古墳群は一ツ瀬川左岸の沖積地から台地上に分布し、前方後円墳５基、円墳36基の総数41基がある。分布の範囲は東西1.3km、南北1.1kmに及び、７つのグループに分けることができる。

前方後円墳は低地に１基、台地上に４基が認められる。低地にある30号墳は、後円部が倒卵形を呈し、前方部が低平で撥形に開くと考えられることから、纒向型前方後円墳の可能性が高いと指摘されている[7]。一方台地上の前方後円墳群は調査されていないが、中期型の墳形を呈している。大正年間には台地下にあった円墳の１基から画文帯神獣鏡３面、刀１振、玉類多数が出土したといわれるが[8]、現在墳丘の所在を特定できない。

29号墳は30号墳の西側50ｍに位置する。平成13年５月頃、墳丘南側に住む町民の方から、古墳の土砂が崩落して困るとの連絡が入った。至急現状を確認すると、古墳を構成する盛土が大きく剥落して住宅の一部に堆積している状況がわかった。住宅建設以前に古墳の一部が掘削されており、長年の雨水で脆弱になったものと思われる。

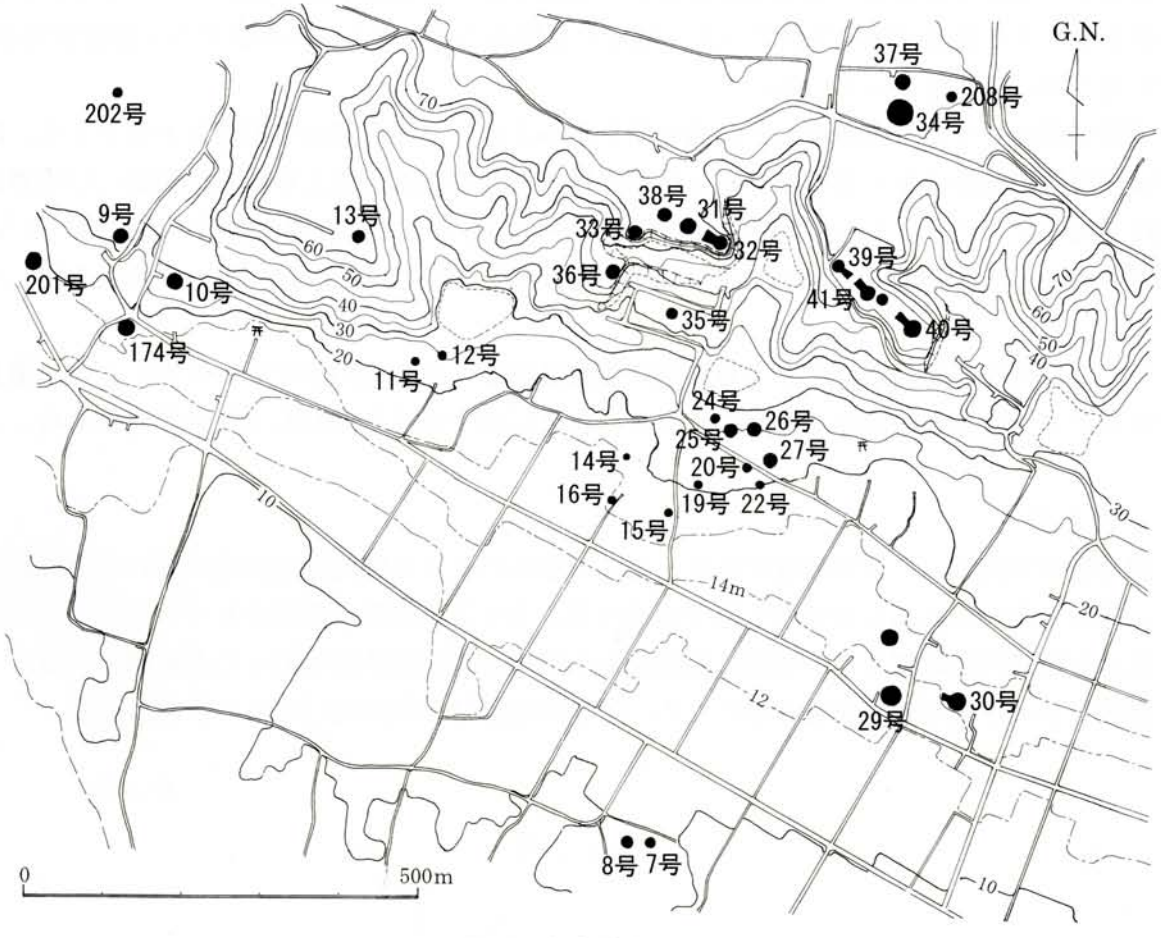


図５　山之坊古墳群

町教育委員会は県文化課職員と現地で協議した。その結果、古墳に繁茂する樹木を伐採すること、墳丘測量調査を行い崩壊部の状況を記録すること、法面の保護を行うこと、といった対応策を実施することとなった。

2．調査の方法

墳丘に繁茂する樹木、特に竹はすべて伐採し、測量の障害になるものはすべて除去した。基準点は墳頂平坦面と想定される頂上のほぼ真ん中に設置し、そこから簡易トラバースを設定した。

基準点のすべてと、レベル移動はすべて業者委託した。スケールは1/200で、25cm間隔の等高線表記を行い、光波測量機を使用した平板で実測した。

崩壊した法面部には一部葺石が露出しており、その上面には厚い堆積土が存在した。見かけの墳端部から見た法面はえぐれて湾曲しており、葺石上面の堆積土が崩壊する危険性が高かった。

そこで、記録写真・図面を作成後、堆積土を除去し、見かけの墳端部から葺石までの高さにあわせ、市販のブロックで防護壁を設置することとした。

3．墳丘測量の結果

墳丘は北から南への傾斜面に立地するため、築造当時の墳端は北と南で異なっていたと予想される。現在は北と南には住宅が近接し、東は町道、西は排水溝で囲われているため、旧地形を知りうる情報は限定されている。墳端も東側の一部を残し、ほかはすべて掘削が及び、特に西と南は急崖になっている。

東側の遺存している墳端をもとに復元径を求めると、直径約25mの円墳と予想できる。段築は崩壊部で観察できた葺石の存在と傾斜変換から二段築成と考えられる。墳頂には南側に向けて緩く立ち上がる土坑が掘削されている。かつて存在していた祠に起因するものだろう。掘削の際の排土が墳頂部に盛られた可能性は高いが、現状で墳丘は約3.5mの高さを有している。

ただし、南側の急崖部に向かう等高線の変化はかならずしも円形になってはいない。墳丘全体もややいびつな楕円形であることから、南側に低平な前方部があった可能性がある。

4．まとめ

29号墳の東約50mには30号墳があり、先にも触れたように纒向型前方後円墳の可能性がある。同じく北50mにある28号墳も低平な前方部を有する可能性が指摘されているので、この3基は古墳時代前期でも早い時期に登場した小規模な首長墓系譜であったと推測できる。

保護対策は予定どおり実施されたため、墳丘の崩壊は未然に防げるものと思われる。

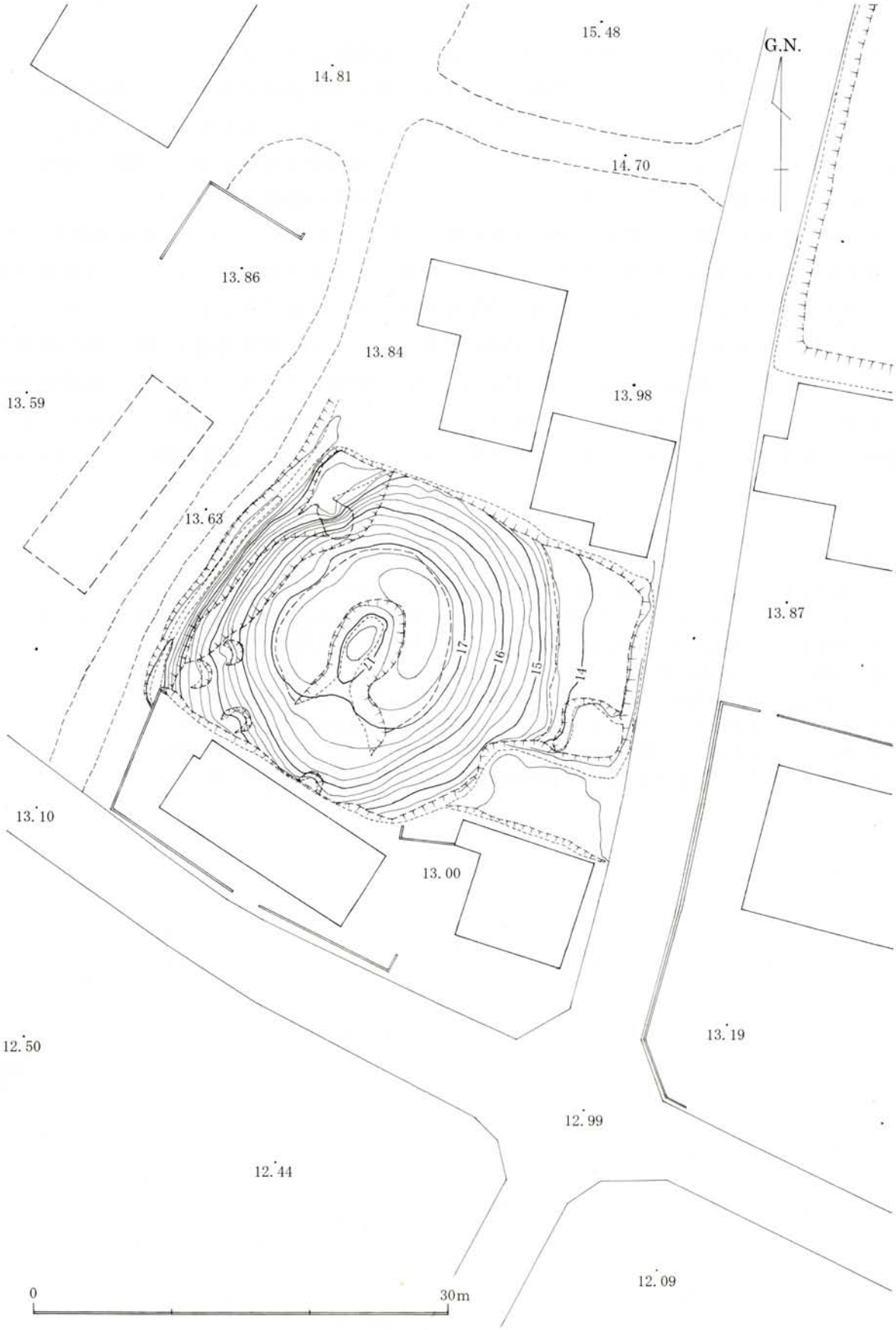

G.N.
15.48
14.81
14.70
13.86
13.84
13.98
13.59
13.63
13.87
17
16
15
14
13.10
13.00
13.19
12.50
12.99
12.44
12.09
0
30m

図6　29号墳

Ⅳ. まとめ

本年度の調査は縄文から古墳時代にわたる時期の遺構確認ができた。

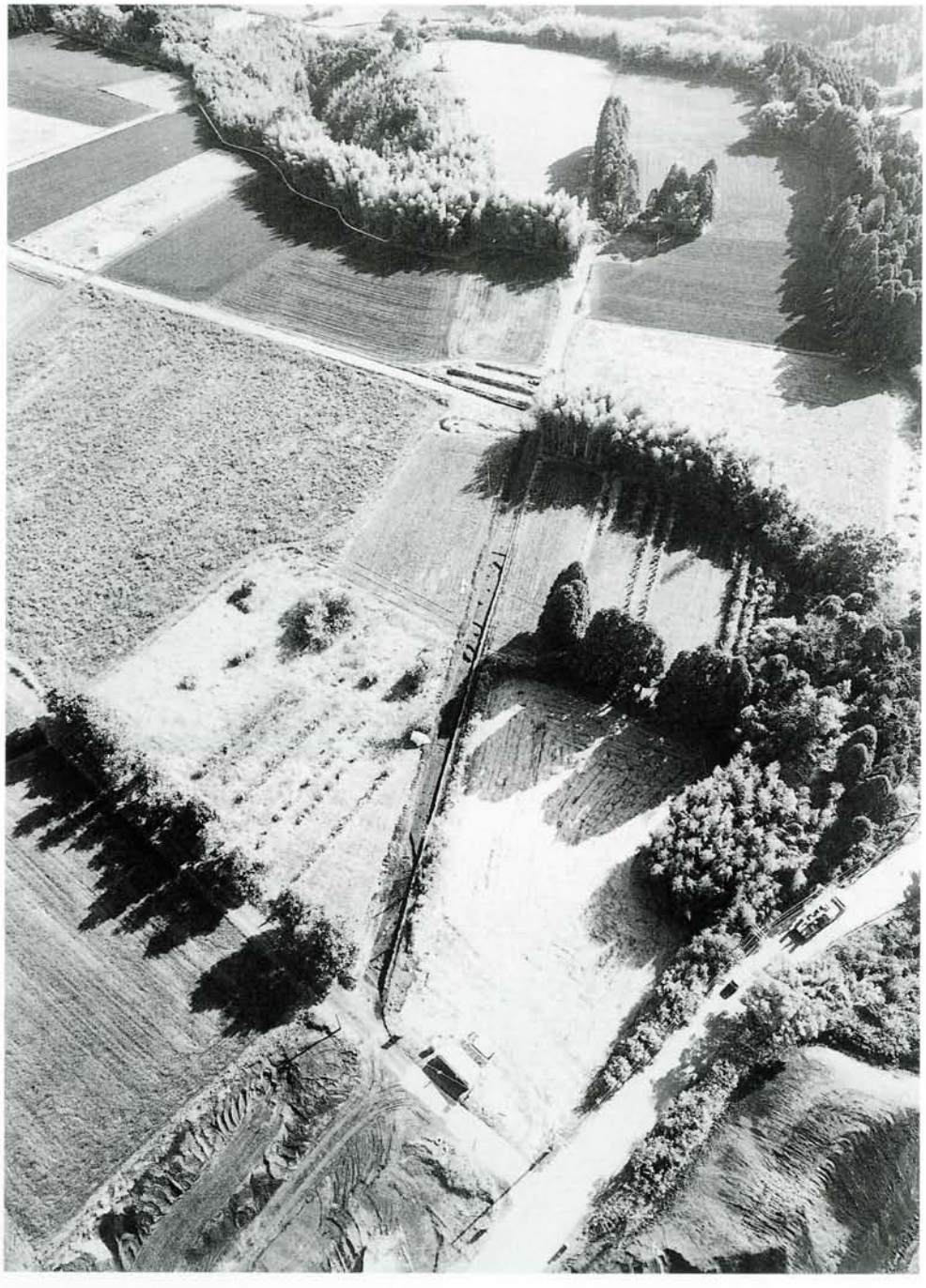
新田原29号墳の調査は山之坊古墳群では２例目の墳丘測量調査であり、30号墳の測量と同様、前期に遡る可能性を有する。同古墳群は集落や山林にあって長く保護の手が遅れたところであった。しかしながら一ツ瀬川左岸にあって広い沖積地を望む立地は古墳群の周囲に広がる集落や生産遺跡の存在も予想させるため、今後も調査の徹底を努力していきたい。

春日地区遺跡も同様で、昭和43年のほ場整備や自衛隊基地設置にともなう集落移転などで、下部遺構の攪乱が進んだ地域である。今年度の調査で集落址の確認が行えたことは重要であり、調査を徹底することによって遺跡の全体像も断片的に把握できるようになってきた。

本町は県庁所在地に近く、近年の交通網の整備による交通時間の短縮がはかられた結果、徐々に人口が増える傾向にある。今後も県道・国道の整備にともなって様々な小規模開発行為が増えることが予想されるが、本年度までに行ってきた調査のように断片的なものでも、遺跡の全体像に迫ることができるような内容が分かるので、調整・調査を徹底していきたい。

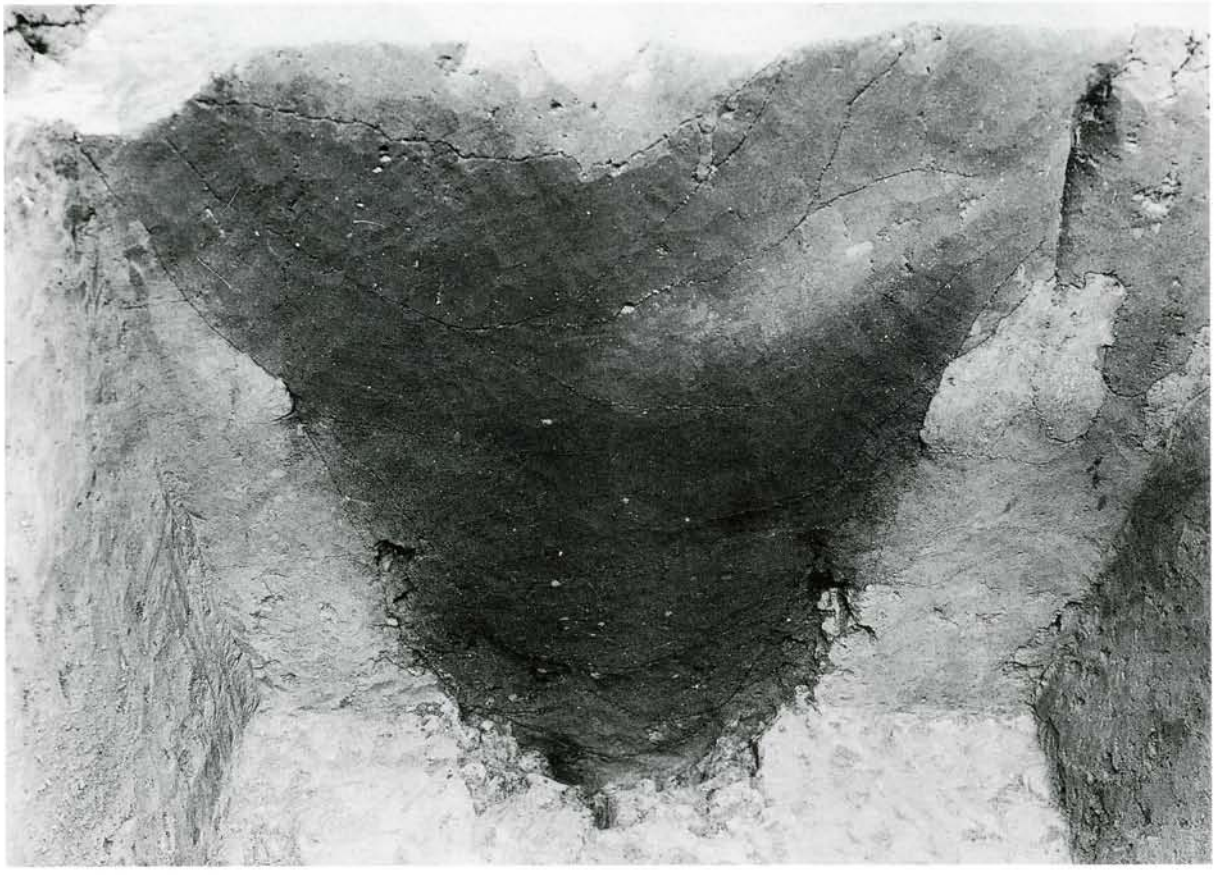
【註】

(1) 有田辰美「花園地下式横穴墓」『宮崎県史』資料編考古２ 1989
(2) 有田辰美「春日地区地中レーダー調査」『新富町文化財調査報告書』第16集　新富町教育委員会 1994
(3) 有馬義人「町内遺跡16」『新富町文化財調査報告書』第29集　新富町教育委員会 2000
(4) 『新富町史』通史編　新富町 1992
(5) 日高宏治「瀬戸口遺跡」『新富町文化財調査報告書』第４集　新富町教育委員会 1986
(6) 金丸武「本野原遺跡」『田野町文化財調査報告書』第44集　田野町教育委員会 2002
(7) 柳沢一男・有馬義人「宮崎県の古墳資料(2)」『宮崎考古』第14号　宮崎考古学会 1995
(8) 梅原末治「新田原古墳調査報告」『宮崎縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第11輯 1941

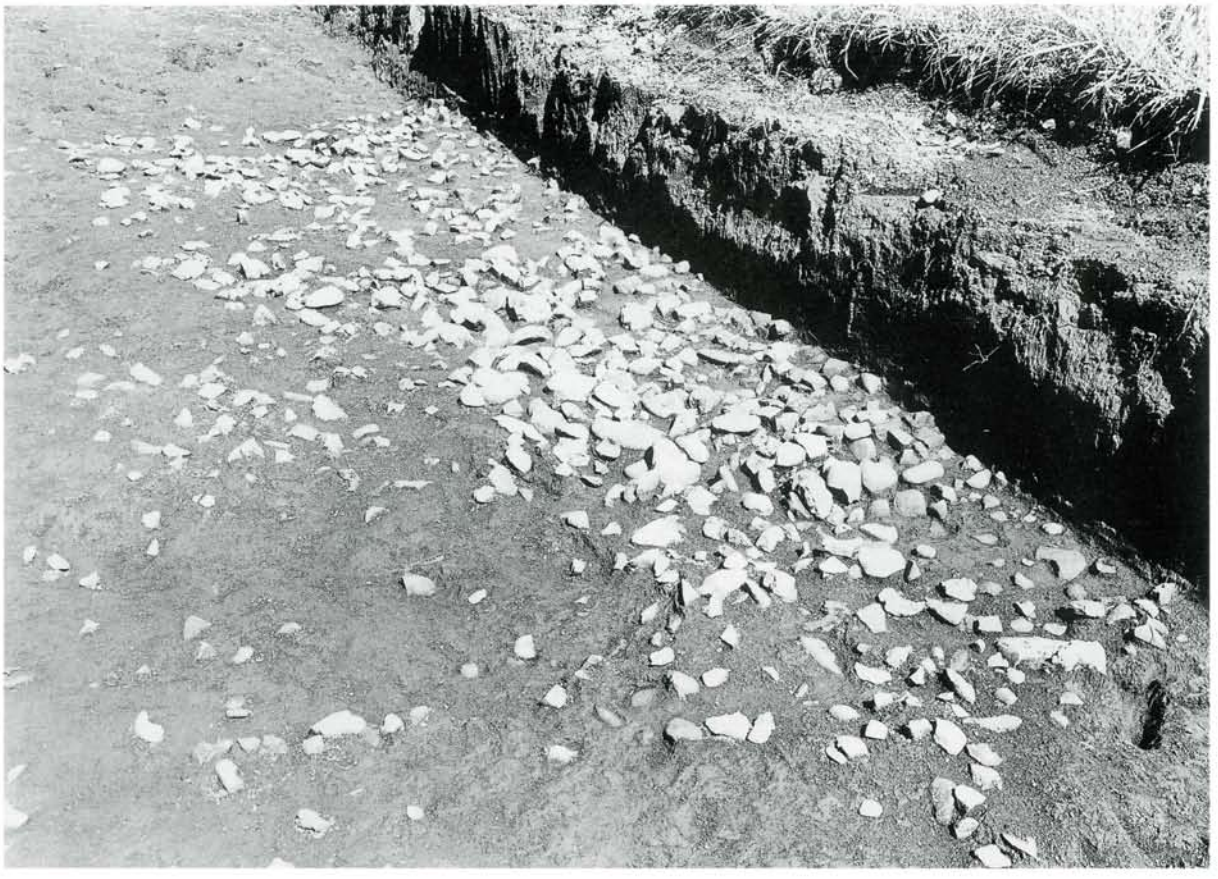


1．B地区（北から）

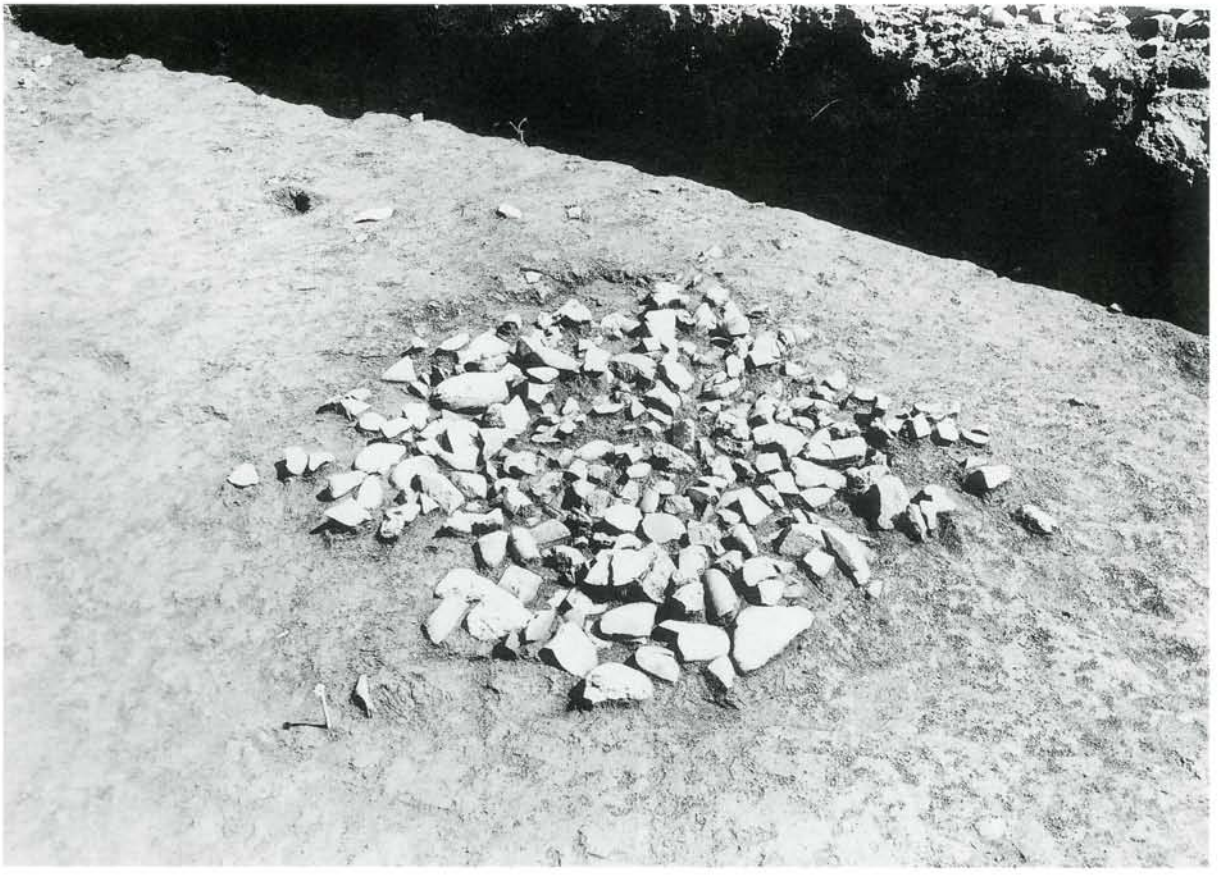
1．SA0202



2．SD0201の土層堆積状態

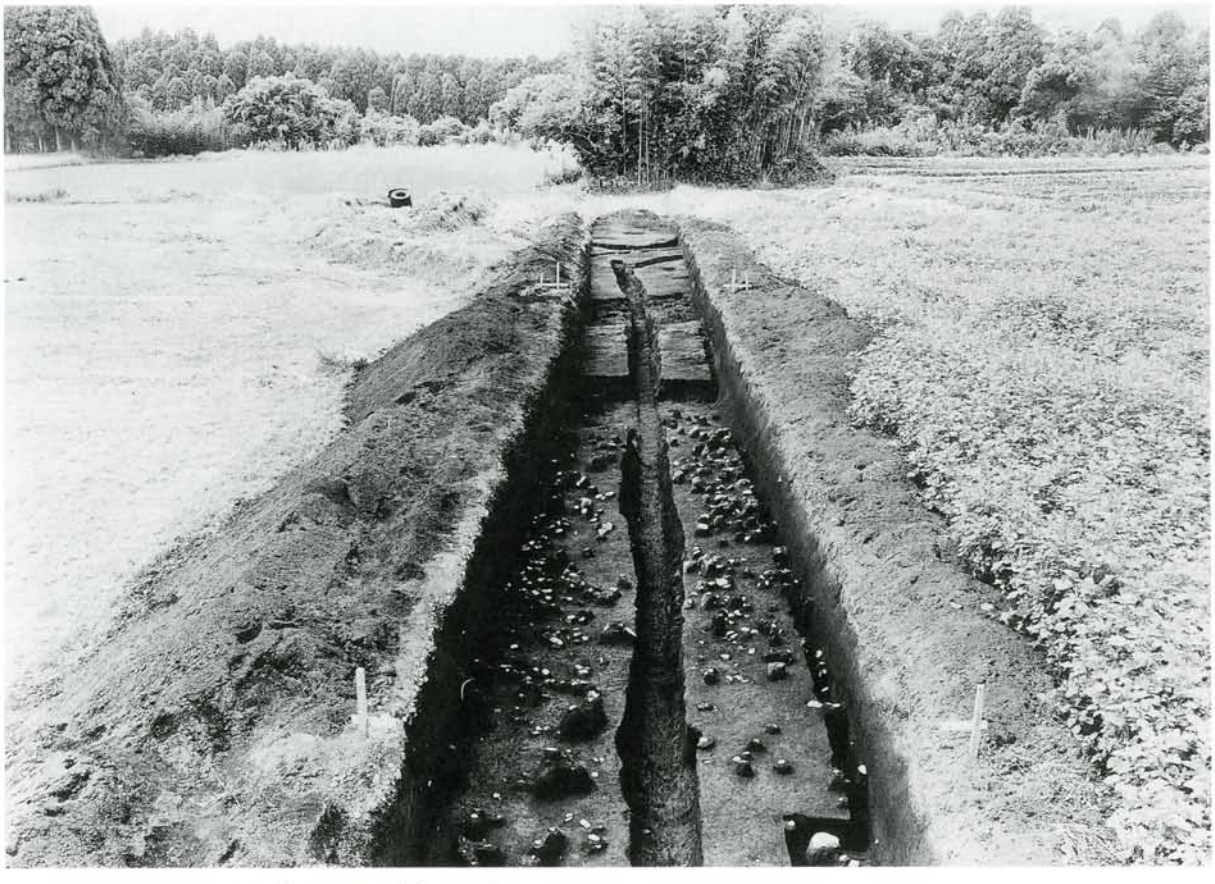


1．SI0204・SI0205検出状態

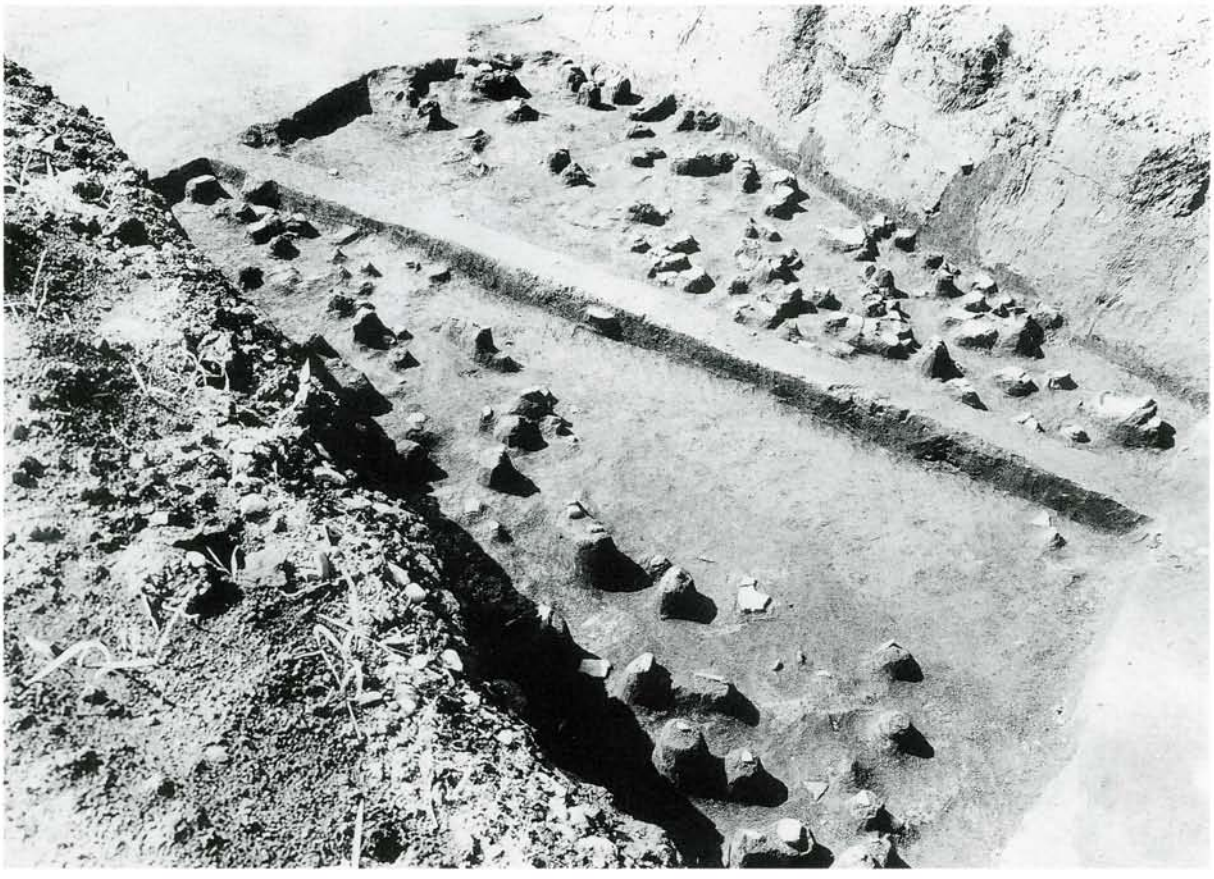


2．SI0201

1．SA0203・同0204



2．A地区の縄文土器検出状況（東から）



1．SA0206遺物検出状況

2．SA0206

1．SA0207

2．SA0210

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちょうないいせき
書名	町内遺跡18
副書名	平成13年度町内遺跡発掘調査概要報告書
巻次	18
シリーズ名	新富町文化財調査報告書
シリーズ番号	第 33 集
編集者名	有馬　義人
編集機関	新富町教育委員会
所在地	宮崎県児湯郡新富町大字上富田7491番地
発行年月日	２００２年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号			
春日地区遺跡２次（かすがちくいせき）	大字新田字曲久保（にゅうた　まがりくぼ）	47	1001	010817～011214	1,619㎡	町道拡幅
新田原29号墳	大字新田字山之坊（にゅうた　やまのぼう）	47	1001	011210～020131	6,000㎡	保存目的

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
春日地区遺跡２次	古墳	古墳時代	古墳周溝	土師器・須恵器・埴輪	縄文後期の土器 古墳中期の集落
新田原29号墳	古墳	古墳時代	前方後円墳か？	なし	墳丘測量

新富町文化財調査報告書　第33集

町 内 遺 跡 18

発行年月日　２００２年３月
発　　行　宮崎県新富町教育委員会
印　　刷　㈱印刷センタークロダ